

モモの収穫後管理

県北農林事務所伊達農業普及所
J Aふくしま未来伊達地区モモ生産部会

1 気象情報

(1) 気象経過

7月は気温が平年より高く降水量は平年より少なく推移し、特に7月3半旬～8月2半旬には乾燥傾向が続いた一方で、8月3半旬の前線の停滞により、降水量が多く気温が平年よりかなり低くなった。(図1)。

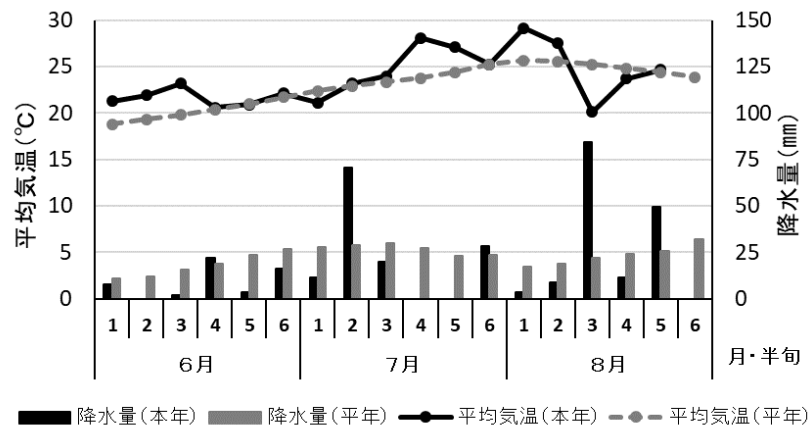


図1 平均気温と降水量の推移 (アメダス梁川)

(2) 1ヶ月予報 (令和3年8月19日発表、8月21日から9月20日までの見通し) ※抜粋

天気は数日の周期で変わるが、向こう1ヶ月の平均気温が高い確率が50%となっている。降水量は平年並の確率が40%となっている一方で、日照時間は平年並の確率が40%、少ない確率が40%となっており、平年並みか少なくなる見込みである。

2 施肥

(1) 礼肥

収穫が終わった品種では、新梢の二次伸長を避けるため9月上旬頃に窒素成分で2～3kg/10aを目安に施用する(表1)。その際に樹勢を確認し、樹勢が弱い～標準であれば上記の施用量を実施する一方、凍霜害により着果量が少なかった樹など樹勢が強い場合、礼肥の施用を控え9月下旬を目安にやや早めに基肥を施用する。なお礼肥で施用する肥料は、ノルチツソ等速効性の肥料を選ぶ。

樹勢に応じて、礼肥の施用量を調節しましょう。

表1 10a当たりの施用量の目安 (礼肥)

資材名	成分量 (N-P-K)	施用量	窒素成分量
ノルチツソ	15.5-0-0	1/2袋 (10kg)	1.6kg
尿素	46-0-0	1/4袋 (5kg)	2.3kg
燦燦あみの (さんさんアミノ)	8-6-7	1袋 (20kg)	1.6kg

※上記のいずれかの肥料を施用する。

(2) 基肥

葉の活力を維持し、貯蔵養分の蓄積を促進させるため、10月上旬頃に速効性肥料と緩効性肥料を組み合わせる（表2）。なお、礼肥を施用しなかった場合は、9月下旬頃に施用する。

表2 10aあたりの施用量の目安（基肥）

資材名	成分量（N-P-K）	施用量	窒素成分量
みらいろ物語 もも基肥	12-10-3	6袋（120kg）	14.4kg
みらいエース	8-10-3	5袋（100kg）	8.0kg
エスコン580 （エスコン化成）	15-8-10	1袋（20kg）	3.0kg
			合計 11.0kg

※上記のいずれかの組み合わせで施用する。

※注意事項 ①樹齢や樹勢を考慮して施用量を加減する。

②地力増進のため計画的に完熟堆肥等の有機物を施用する。

③肥料成分が流亡しやすい園地では基肥の施肥量の半分程度を春肥に振り分ける。

3 秋季せん定及び縮・間伐の実施

(1) 秋季せん定

樹勢や徒長枝の発生程度を観察し実施するが、樹勢低下している樹やせん孔細菌病による落葉が目立つ樹は、最小限度のせん定とする（樹冠内部に発生している長大な徒長枝を間引く程度にする）か、実施しない。

ア 目的

- ・薬液が樹冠内部まで届くようにし、秋季防除の効果を高める。
- ・新梢の過繁茂を解消することにより花芽の充実を促進する。特に骨格枝基部に多く着生している中・短果枝に日光を当てることで花芽の充実を図る。
- ・冬期のせん定に比較してせん定による傷口を小さく抑えることで、せん定後の傷口を癒合しやすくし、病原菌の感染を防ぐ。
- ・冬季の強せん定を防ぎ、次年度の極端な枝の反発を抑える。

イ 時期

収穫が終了している早生～中生種に対し、9月上旬～中旬に実施する。早生種から開始するが時期が早いと二次伸長が起こりやすく、遅いと貯蔵養分が蓄積された枝を切り落とすことになるので、適期に実施する。

ウ 秋季せん定のポイント

- ・樹冠内部（特に主幹から1m以内）の骨格枝背面に発生している長大な徒長枝など、明らかに不要な枝を中心に実施する。骨格枝の先端付近（2m程度）の徒長枝はせん除しない（図2）。
- ・徒長枝は基部葉を4～5枚程度残して（基部に小枝がある場合は小枝を残して）せん除する（図3、4）。
- ・結果枝のせん定はこの時期は行わない。

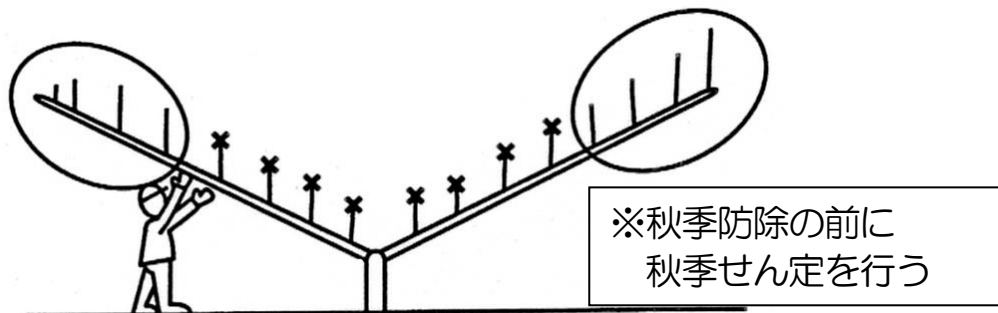
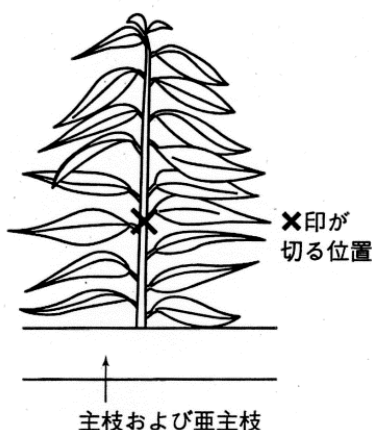


図2 秋季せん定の実施位置

A: 基部に小枝のない徒長枝の場合



B: 基部に副梢がある徒長枝の場合



夏の間の新梢の摘心などにより、副梢が発生している場合は、基部の副梢を残して切る。数多く残しても混み合うだけなので、15cm以下の短い枝(図中の④⑤⑥の枝)を残して、あとはせん除する

図3 基部に副梢のない徒長枝の切り方

図4 基部に副梢のある徒長枝の切り方

出典:「現代農業」より抜粋 (JAふくしま未来、藤島氏原図)

(2) 縮・間伐の実施

植栽間隔が狭い園地は、園地全体の採光性が低下する。採光性の低下は、果実の品質低下だけでなく、結果枝の枯れこみなどの原因になるため、枝の混み具合が分かり易いこの時期に縮・間伐を実施する。

4 病虫害防除

(1) モモせん孔細菌病対策の秋季防除

来年の春型枝病斑の発生を最小限に抑えるために、秋季防除を徹底しましょう。

本病の病原菌は9月以降に新梢の落葉痕や皮目から新梢組織に侵入し、翌年に春型枝病斑を形成する。このため新梢への菌の侵入を防ぎ、来春の春型枝病斑の発生を少なくすることを目的に秋季防除を徹底する。

ア 落葉時期が11月頃まで遅くなってきていることから、秋季防除3回を基本とし落葉状況に応じて4回目の防除を実施する。

イ ICボルドー等無機銅剤の残効性は2週間程度であることから、最初の秋季防除から15日間隔で防除を行う。

ウ 薬剤の通りを良くし防除効果を高めるために、秋季防除を実施する前に秋季せん定を実施する。

- エ 散布ムラをなくすために、薬剤散布量を400L/10aとする。
- オ 台風通過後に落葉痕への感染が懸念されることから、通過前に防除を行う。降水量が著しい場合には通過後に改めて防除を実施し、その後15日間隔で防除を続ける。
- カ 高温時や散布直後の降雨により薬害が発生する恐れがあるため、散布予定日前後の気象状況に注意する。

表3 直近の防除暦の内容について

散布回数	散布時期	散布薬剤及び濃度	散布液量	備考欄
18	9月上旬 (9月5～10日頃)	展着剤 (アビオン-E) 1,000倍 ICボルドー412 30倍 または 4-12式ボルドー液(※) ①生石灰 1.2kg/100L ②硫酸銅 0.4kg/100L または コサイド3000 2,000倍 クレフノン 100倍	400L	4-12式ボルドー液の作り方は、令和3年版果樹病虫害防除暦P94を参照する。
第19回以降は、令和3年版果樹病虫害防除暦に準じて、第18回の散布日から15日間隔で防除を行う。				

※表3の注意点

- 表3の農薬使用法は令和3年8月20日現在の農薬登録内容に基づき記載した。
- 散布回数の記載はJAの令和3年版果樹病虫害防除暦に準じた。
- 展着剤は適宜加用する。
- ほ場の周辺環境等考慮し、散布薬剤をJAの令和3年版果樹病虫害防除暦から随時選択する。
- その他の注意点はJAの令和3年版果樹病虫害防除暦に従う。

- ◎近年増加している気象災害に備えるために、収入保険の加入を検討しましょう！
- ◎農薬散布の際は隣接する作物に注意し、飛散しないように注意しましょう！
- ◎農作業事故や熱中症に注意して作業を進めましょう！